

謹んで故吉村喜代造様の御霊に申し上げます。

三十四年からのお付き合いですが、私はいつも先生とお呼びしていました。会社の税務顧問と入社二年目の総務担当、会社にお見えになると会釈を交わす程度、そのうちことばをかけていたかどうかになりました。

頑張りなさい、勉強しなさい、面白くやりなさい、面白いかな？

人と話すのが苦手と言って事務方の末端を務めている小生を、上司とは別の立場で気にかけてくださいましたが、先生との関係は、ベテラン税理士と息子世代の些か覇気を欠いた中小企業の総務担当、という関係を超えるものではありませんでした。

やがて税務に強いベテランの取締役総務部長が卒業され、小生より一回り上の後任者も卒業、私が総務の責任者になり、顧問税理士と幾分か経験を積んだ総務担当として話しする機会も増えましたが、ゴルフをしない私との話題は限られたものでした。

「天下の形勢はどうかね、ニッポン国はどうなるのかね」、それに対する私の答えは「小市民には分かりません。会社の動きは一応分かります。」、相変わらず覇気のない対応でした。

その中でご子息が作家になられたことを伺いました。

以来、先生はご子息の記事の載った雑誌が出るたびに届けにこられ、私が先生の目の前で走り読みして感想を述べる、という新しいお付き合いが始まりました。

『ビーパル』というアウトドア雑誌は本屋のビニール袋に入れたまま毎月届けていただきました。定期訪問の回数が「近くに来るついでがあつて」と増えました、私とは仕事の話はありませんでした。

『ビーパル』は書類保管箱にいったいになり、掲載記事は「漁師になろうよ」という一冊にまとまりました。

あるときどこかの会報に載せるという原稿を読ませていただきました。戦争体験に触れた内容でした。

先生は所謂「学徒出陣」されて、「海軍飛行予備学生14期」でした。飛行機には乗れなかった、だから今こうして生きている、優れた学生がたくさん亡くなったよ、そんなことをぼつりと話されたことがあります。

思いつくまま感想を述べると、「息子が直してくれたけど、ここがちよつと」と言われました。時代背景の説明の部分でした。

「いくらプロの筆でも、息子さんののは、所詮教科書で教わった時代説明、先生の表現は、体験に基づいたもの、揺るがせないでしょう、迫力が違いますよ。元に戻されたらいかがですか」といっぱしのことを言うと、先生はさも、わが意を得たり、という顔をされました。

その文章をどのような形で載せられたかは、報告はありませんでした。せつかくの親子関係に水を注したと後悔しております。

五月二十五日、消費税申告書に署名・捺印をいただくため入院先の大阪南医療センターに参りました。飲まず食わずで二種類の点滴をしておられました。八時間と十二時間、大変に疲れておられるようでしたが、気力はまだ十分でした。

壁に奥様の書が貼ってありました。

「体を毀したらいかんよ。今になって後悔ばかりや、働くことはよう働いてきたが、働くことばかりで、家内に何もしてやれなかった。長い間お世話になったが、今期で引かせてもらう、ありがとう、ありがとう」

六月二十四日に法人税申告書、地方税の申告書に署名・捺印をいただくため病院に伺いました。点滴は一種類になっていました。

資料をお見せして決算の概要を説明し、申告書の主要頁をお見せすると、食い入るように見ておられました。

「今期はうちで初めての現象が起きています、予定納税分が大幅に戻ってきます。下期が全然振るいませんでしたから」と言うと、うーんと唸って「どこもやから」とはつきり反応されました。

しかし、体をご自分で起こすことができませんでした。看護師さん呼んでベッドをいっぱいに起こして、膝をなんとか立てて、ファイルを下敷きにして、署名の練習をして、それから六件の申告書に署名していただきました。四枚目はどうか、と不安でしたが、写っていました。

全部の署名が終わって、私が捺印を代行し、作業を終えました。

互いに、長い間お世話になりました、とことばを交わしました。

帰りしなに「もう一度参りますから」と言いました。先生は繰り返し「有り難う、体を毀すな」と言われました。

先生、早いじゃないですか、息子さんを交えて酒を飲む話じゃなかったので、すか。

訃報に接して思ったことは、芭蕉が詠んだという一句です。記憶があいまい

ですが、

「ゆきゆきてたおれふすとも萩の原」。

「ゆきゆきてたおれふすとも萩の原」。

先生、今頃は、六十四年前に散華された海軍飛行予備学生14期の皆さんと一献傾けておられるのでしょうか。中には次のように言う方が居られるかもしれません。

「吉村、貴様、随分の遅参じゃないか」

ならば、先生の見てこられた六十四年間のニッポン国を語ってください。

先生、ゆっくりとお休みください。十二分に働かれたのですから。

若い友人として K・T